

2012/07/27(FRI)

ローザンヌ・ビジョン・ミーティング

イエスに学び、イエスに従う

—繁栄の神学と世俗的リーダーシップの蔓延を防ぐために—

大坂太郎 (アッセンブリー・ベテルキリスト教会牧師・
日本福音主義神学会東部部会理事長)

はじめに

90年代にシンガポールで神学教育を受けた私にとって、今やシンガポール有数のメガ・チャーチとなったシティ・ハーベスト教会の主任牧師コン・ヒーの不正会計による逮捕は衝撃であった。しかし「来るべきときが来たな」という思いがあったのも事実である。というのも当時から私の級友達はよくコン・ヒーを引き合いに出して「彼は確かにカリスマ性のある魅力的なリーダーではあるが、あの聖書解釈はどうなんだろう」ということをよく話し合っていたし、今から3年ほど前、シンガポールから来た牧師の通訳を依頼されたときに「最近、コン・ヒーが『イエスが貧乏人ではない9つの理由』説教をしているのを知っているか」ということを聞いたときも「果たしてこれでよいのかな」と思ったことがあったからである。勿論この事象は現在進行中のものであるから憶測に基づく過剰な非難は避けねばならないが、非常に成長し、世界中にインパクトを与えていると目されていた教会がリーダーシップに問題を抱えていた事はまず間違いのないところである。

この教会のリーダーシップと繁栄の福音の問題について第三回ローザンヌ世界宣教会議の成果である『ケープタウン決意表明』には以下の言明がなされている：

「急成長する教会の中にあるもろさ、その理由の1つが弟子訓練されたリーダーの不在であり、別の理由は多くのリーダーがその地位を世俗的な権力や尊大な地位や私腹を肥やすことに利用している（『コミットメント』71頁）」

「彼ら（繁栄の福音の信奉者）がしていることやライフスタイルは往々にして非倫理的であり、キリストに似ないものであると私達は考える（『コミットメント』、84頁）」

前述の6月末に報道され、全世界を駆け巡ったニュースとケープタウン決意表明を並置するときに、改めてケープタウンコミットメントの預言者的視座に敬意を表する。だがこの大きく、且つ複雑な問題について考え、その蔓延を防ぐために一体どこからはじめればよいのだろうか。幸いに『コミットメント』ではその端緒を明快に示している。それは私たちの主、イエス・キリス

トの奉仕の姿である。そこで今回の発題においてはマタイ 20:25-28 にあるイエスの姿を見つめ、「この世」のために、「この世」から分かれた我々が所定の課題に対して何をすべきかについて2つのことを考えたい。

I. 現状をありのまま認め、語る

25 節においてイエスは「あなたがたも知っているとおりに、、、」と話しはじめ、この世の支配と権力の現実について語っている。ここでイエスはまず弟子たちが知り、且つ体験している生の現実と罪に汚れた人間の本质について語っているのである。この姿勢は実に大切である。なぜなら、現状を正しく認め、向き合わないものには空疎な大本営発表の例を見るまでもなく、未来はないからである。私達が教会の内部でリーダーシップの混乱や不適切な行為があるという連絡を受けると、ともすれば「あれは〇〇派の問題だから」と我関せずの態度を決め込みたくなるが、具体的なアクションをどうするかということはさておいても、地上における戦う教会には教派を問わず「この世」の現実とその力が働いているのを認めねばならない。そして先に述べたような「〇〇派だけの問題でしょ、あれは」といった自らを聖域化する態度を止めねばならない。イエスが「、、、ということあなた方は知っています」と現実の状況を正しく把握したように、私たち教会はこの世の支配と権力の原理の只中に存在しているという事実を素直に、かつありのままに認めていくことが大切である。

II. イエスの革命的なリーダーシップ・モデルに従う

上述のようにこの世の支配と権力の原理を示したイエスは、26 節においてまず、あなたがたの間 (ἐν ὑμῖν)、すなわち弟子たちの間ではそのようであってはならないと述べた上で、「仕えるしもべとしてのリーダー像」を提示し、さらにその奉仕の模範としてご自身の一連の行動、即ち彼の地上世界への来臨、さらには贖いの代価として自分のいのちを与える一連の行動を示され、それに従うように招かれた。

もっともイエスが自分のいのちを与えるということを示したからとて、私たち主の弟子たちが自分のいのちを他者のために贖いの代価として与えねばならないということには当然ならない。しかしながら十字架の贖罪の業は間違いなくイエスの自己犠牲的な奉仕の収斂点であり（洗足はその途上にあるものに過ぎない）、イエスはその姿をもってリーダーシップを教えられたと記しているのは実に興味深いところである。つまりイエスの弟子たちに求められるリーダーシップには諸所に「犠牲をいとわずに仕える」「死んで生きる」というイエスと相似の姿勢が見えてこなければならないのである。

おわりに

ジャパン・アズ・ナンバーワン。あの80年代の栄光からバブルの崩壊と転落を経て日本経済はいまだに失われ続けており、企業ではその打開のためにリーダーシップ・モデルを探しているようであるが、何とその中に「サーバント・リーダーシップ」がある。提唱者のR. K. グリーンリーフがこの分野で大きな影響を与えたP. ドラッカーに「私が出会った中でもっとも賢い人」と評されることもあるのだろう、少し検索しただけで多くの邦語の資料に手が届き、実際にそれを実践しているビジネスマンも少なくないようである。

だが教会ではどうか。いまだに富と健康を至上の価値とする繁栄の福音が語られているという厳しい現実がある。前出のコン・ヒーが最新のきらびやかなアリーナから、幾千、いや数万のオーディエンス（！）に向い「ああ、イエスは貧乏なんかじゃなかったんだ。なんたって、彼は、いいかい、金庫と、そうフルタイムの会計係をつれて歩いていたんだから、ハッハッ」と叫ぶ映像が¹流され、さらにそれが「真のクリスチャンはかの日のパリサイ人がもっていたような間違った伝統を捨てて祝福を得ねばならないのだ」という前後関係の中に置かれれば、オーディエンスが「今までの教えは間違っている。繁栄の福音こそ福音だ」と誘導されるのは必定なのである。もっともコン牧師の言うことにも一理はある。確かに真の霊性は「貧しければ貧しいほど清くなれる」というような機械的なものではないし、史的イエスの視座から見れば「イエスには専任の会計係がおり、しかも彼に盗まれてもミニストリーが進むだけのお金はあった」というのも恐らくはその通りである。しかし残念ながら彼は決定的に間違っている。というのは私たちが見つめなければならないのは、歴史的事実の今日の時流にあわせた捏造的再現ではなく、あくまで聖書自身に書かれているイエスご自身の証言であり、そして今日のテキストにおいて示された道とは「支配する立場にいるものが人に仕える」というこの世とは異なる次元のリーダーシップなのである。ゆえに主の弟子である教会はたとえ世俗のリーダーシップや繁栄と祝福のモデルがいかに文化に強い影響力を与えるものであり、効率的なものであったとしても、それは真理からの妥協であるということを告白し続けねばならない。それでこそ私達はイエスの革命的運動の後継者となるスタートラインにたつ事になるのである。

この世にある「企業」が声高にサーバントリーダーシップを取り上げ、ノンクリスチャンのブログなどでもこのモデルがイエスの奉仕に遡ることまでを伝えているという事実は、私たち今日を生きるキリスト者にとって間違いなく大きな挑戦である。イエスはこの教えを「あなたたちの間では、、、」とってこのモデルを語っていることをもう一度覚えたい。そしてイエスの革命的運動の継承者は実にこの私たちであると胸をはって言えるように、聖書に書かれた信仰の創始者であり、完成者である主イエスの生活のナラティブを見つめ、強者による支配と抑圧ではなく、むしろ仕えるリーダーの犠牲的奉仕による「この世とは一風変わった」共同体の形成を目指したいものである。

¹ <http://www.youtube.com/watch?v=pXwoaqDJD6Q>